

「学校設定教科・科目」の設置とその運営

○飯田 浩之（筑波大学）

○遠藤 宏美（筑波大学大学院）

1. 問題の所在と研究の課題

平成 11 年 3 月の『高等学校学習指導要領』改訂の柱の一つに、「学校設定教科」「学校設定科目」（以後、合わせて「学校設定教科・科目」と表記）の設置がある。その設置は、従前の「その他特に必要な教科」「その他の科目」（「その他の教科・科目」と表記）を継承すると同時に、それまで学校設置者の権限であった、教科・科目の名称、目標、内容、単位数等の決定を各学校に委ねるという意味をもっていた。「学校設定教科・科目」は、『指導要領』の移行措置により平成 12 年度から実施されるに至ったのであるが、本報告は、この実施にほど近い時点（平成 14 年度）において、「学校設定教科・科目」を設置している学科を対象とした調査の結果から、設置の状況を概観すると同時に、その堅実な運営をめざす取組みに焦点を当て、設置の在り方との関連を探ることで、「学校設定教科・科目」の今後の可能性を探ろうというものである。

改めて「学校設定教科・科目」の設置・運営に関わる特徴を記しておけば、以下の通りである。

- ①設置するか否かは学校の裁量に任されており、設置にあたっては、学校の意向が強く反映する。
- ②高等学校のカリキュラムは学科単位で構成されており、「学校設定教科・科目」の設置にあたっては学校の意向と同時に各学科の意向も強く反映する。換言すれば、学科ごとに、あるいは同じ学科でも学校によって、科目の数も内容も位置づけも異なることが予想される。
- ③いずれにしても、「学校設定教科・科目」の設置においては、学校（学科）の意向が大きな意味をもち、教科・科目に込める「ねらい」と、学校（学科）として「ねらい」を込めた教科・科目を取り立てて設置する「意図」が問われてくる。
- ④「学校設定教科・科目」を設置した場合、その運営についても学校（学科）に多くの部分が委ねられる。学校として、学科の特性を踏まえ、設置のねらい・意図の実現を目指す堅

実な運営が求められる。

- ⑤堅実な運営のための取組みは、「学校設定教科・科目」の特性から、次のようなものであると考えられる。

ある程度の数の設置／従来の教科・科目の枠を超えた内容の設定／カリキュラムとしての充実を図っていくための努力—たとえば、テキストの指定・作成、授業経験の蓄積・評価など—／生徒や保護者に対する責任ある説明／担当者（教員）の適切な配置、力量、組織化（実施のための体制づくり）

このように、「学校設定教科・科目」の設置・運営には、とりわけ着目しておくべき幾つの特徴が存在している。果たして発足時においてこうした特徴は、どのように関連し合い、「学校設定教科・科目」の実施を方向づけていったのか。「学校設定教科・科目」がその主旨に沿って堅実に運営されるための取組みはどこに淵源をもち、その実際にはどのようなインプリケーションがあるのか。

本報告は、このような問題意識のもとに、次の点を明らかにしようというものである。

- (1)「学校設定教科・科目」の設置の概況および設置の「ねらい」と「意図」
- (2)「堅実な運営のための取組み」の実際と、その背景。とりわけ、設置の「ねらい」「意図」との関連性

なお、本報告のもとになった調査の概要は、以下の通りである。

- *調査票配布対象：全国 24 の県・政令指定都市において平成 14 年度に「学校設定教科・科目」を設置していた学校、488 校（全国の都道府県・政令指定都市の各教育委員会に対する調査より設置校をリストアップ。それをもとに、まず、対象とする県・市を選定、さらにその中から、無作為に学校を抽出。当該の学校において最も多くの「学校設定教科・科目」を設置している学科を対象に回答を依頼）
- *有効回答学科：302 学科（学校ベースの有効回答率：61.9%）
- *調査の方法：郵送法
- *調査の期間：平成 15 年 1 月下旬～2 月中旬

※本報告は、平成 13～14 年度科学研究費補助金 基盤研究(C)課題番号 13610276「高等学校における『学校設定教科・科目』設置の意図・成果・課題に関する実証研究」(研究代表者：飯田浩之)の成果に基づいている。

2. 「学校設定教科・科目」の設置

(1)設置の概況

調査で把握した「学校設定教科・科目」設置の状況は、以下の通りである。

① 1 学科当たりの科目設置数は、平均が 13.2 科目。ただ、1 科目のみ設置している学科から 100 科目近く設置している学科まで幅が広い。中央値が 7.4 科目であり、55.7%の学科は、10 科目未満の設置である。

② 学科別では、総合学科において設置科目数が多い(平均: 36.9 科目/中央値: 34.0 科目)。次いで設置科目数が多いのは、普通科(平均: 13.1 科目/中央値: 8.5 科目)であり、専門学科における設置科目数は相対的に少ない(平均: 7.7 科目/中央値: 4.9 科目)。

③ 当該学科のカリキュラムとの関係では、それを「発展・展開させる位置」に設置した学科が 35.4%、「補充・補完する位置」に設置した学科が 29.5%、「中核的な位置」に設置した学科が 25.8%となっており、若干の差はあるものの三者ともほぼ同じである。「中核的な位置」に設置した学科が目立っているのは、専門学科。逆にそうした学科が少ないのが総合学科。位置づけが分かれているのが普通科。

④ 「学校設定教科・科目」のなかで「必修」として生徒に課されている科目の割合は、全体の平均が 15.5%。専門学科で平均が高く(28.4%)、総合学科で低い(3.6%)。

⑤ 「その他の教科・科目」から引き継いで設置している学科の割合は、82.5%。「その他の教科・科目」との連続性が強い設置状況。

(2)設置の「ねらい」と「意図」

① 設置の「ねらい」に関する質問 14 項目に対する回答(重視している程度)を因子分析した結果は、表-1の通り。設置の「ねらい」の基軸は、生徒の「学習領域の拡大」「就職・資格取得への対応」「高等教育進学への対応」「基礎学力の育成」の4つ。学科により、「ねらい」にも特徴(表-2)。「学習領域の拡大」「基礎学力の育成」をねらいとする傾向は、総合学科に顕著。「就職・資格取得への対応」をねらいとする傾向は、専門学科。「高等教育への対応」をねらいとする傾向は、学科による差がほとんどない。

表-1 学校設定・教科科目 設置のねらいの基軸 (因子分析結果/全体)

	第1因子 学習領域の拡大	第2因子 就職・資格取得への対応	第3因子 高等教育進学への対応	第4因子 基礎学力の育成
生徒に、社会で問題となっていることを考えさせること	0.689	-0.059	0.209	0.003
生徒に、地域のことを学ばせ、地域の問題を考えさせること	0.695	0.348	0.005	0.019
生徒に自分自身の生き方・在り方を考えさせること	0.592	0.120	0.012	0.229
生徒に、社会のルールやマナーを身につけさせること	0.577	0.469	0.013	0.225
生徒に広い視野を持たせ、豊かな教養を身につけさせること	0.524	-0.067	0.061	0.199
生徒に興味や特技を深めさせたり、その幅を広めさせたりすること	0.382	0.165	-0.136	0.172
生徒に、資格を取得させたり、検定に合格させること	0.033	0.760	-0.026	0.306
生徒に就職後に役立つ技術や技能を身につけさせること	0.051	0.618	-0.095	0.383
技能審査の成果やボランティア活動を単位化として認定し、生徒に多様な形態の学習機会を与えること	0.314	0.501	-0.121	0.066
生徒に、通常の教科・科目を超えて、より専門的・発展的に学習させること	0.143	0.180	0.165	-0.050
生徒に高等教育(大学等)へつながる学問的内容を学習させること	0.061	-0.043	0.946	-0.160
生徒に大学等へ進学できるだけの学力をつけさせること	0.010	-0.091	0.671	0.082
大学等に進学しない生徒に適した学習内容を提供すること	0.234	0.228	-0.079	0.780
高校教育についていけない生徒に基礎的な学力をつけさせること	0.242	0.237	0.019	0.580
寄与率 (%)	15.5	12.5	10.5	10.0

注) 主因子法/バリマックス回転

表-2 設置のねらい 因子得点平均(学科別)

		第1因子		第2因子		第3因子		第4因子	
		学習領域の拡大		就職・資格取得への対応		高等教育進学への対応		基礎学力の育成	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
普通科	(N=124)	0.029	0.888	-0.362	0.861	-0.008	0.954	0.067	0.855
専門学科	(N=129)	-0.058	0.921	0.316	0.756	0.024	0.983	-0.109	0.845
総合学科	(N=32)	0.119	0.517	0.129	0.639	-0.065	0.924	0.179	0.727

② 設置の「意図」に関する質問 11 項目に対する回答(意図している程度)を因子分析した結果は、表-3の通り。「意図」に関しては、「学科のアピール」「生徒の実態への対応」「指導体制の強化」の3つの基軸が析出。学科による特色を示しておく(表-4)、「学校設定教科・科目」でもって「学科のアピール」を行おうとしている傾向が強いのが専門学科。「総合学科」の場合、「生徒の実態への対応」を意図する傾向にある。「指導体制の強化」という「意図」に関しては、普通科も専門学科も総合学科も同様の傾向にある。

表-3 学校設定・教科科目 設置の意図の基軸 (因子分析結果/全体)

	第1因子 学科の アピール	第2因子 生徒の実態 への対応	第3因子 指導体制の 強化
入学希望者をふやし、志願倍率を高めること	0.702	0.068	0.266
教育課程の特色を校外に向けてアピールすること	0.662	0.117	0.062
地域・保護者の期待・要望に応える教育を提供すること	0.501	0.477	0.115
学科やコースの特色をより明確化すること	0.491	0.028	0.106
進学や就職の実績を向上させること	0.451	0.346	0.144
教育課程編成における学校の主体性を高めること	0.418	0.292	0.251
生徒の実態に応じた教育を提供すること	0.047	0.721	0.135
生徒の個性を重視した教育を提供すること	0.056	0.544	0.127
生徒の学習意欲を高めること	0.222	0.465	0.183
教員間の協力・協働を促進すること	0.180	0.244	0.878
教員に教材研究や授業実践の力量をつけさせること	0.288	0.241	0.697
寄与率 (%)	17.9	14.6	13.7

注) 主因子法/バリマックス回転

表-4 設置の意図 因子得点平均(学科別)

	第1因子		第2因子		第3因子	
	学科のアピール		生徒の実態への対応		指導体制の強化	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
普通科 (N=127)	-0.194	0.865	0.074	0.884	-0.083	0.964
専門学科 (N=131)	0.209	0.826	-0.106	0.744	0.072	0.875
総合学科 (N=34)	-0.080	0.746	0.134	0.830	0.032	0.862

3. 「学校設定教科・科目」の運営

先に示したように、学校設定教科・科目の運営上のポイントは、以下の通りである。

- ①従来の教科・科目の枠を越えた内容を設定すること
- ②生徒の個別のニーズに対応すべく、柔軟に、かつ幅広く設置すること
- ③学習指導要領に規定されないがゆえに、カリキュラムとしての充実を図る必要があること
- ④各学校が独自に設置するものであるため、生徒や保護者に対して説明責任を果たす必要があること
- ⑤社会人講師を含めた担当者の決定や配置など、実施の体制づくりが必要なこと

これらは、各学校において学校設定教科・科目を一過性のものとしてではなく、継続したものにしていけるための堅実な運営を目指す取組み、いわば基礎固めであるといえる。

(1)学校設定教科・科目の堅実な運営を目指す取組み

上記のポイントを考慮しつつ、実際の学校設定教科・科目の運営においてどのような取組みがなされているのかを、単純集計の結果から整理すると、以下の通りである。

- ①従来の教科・科目の枠を越えた内容を含ませたり、独自のテキストを作成・使用したりするなど、学校設定教科・科目に特徴的な運営の取組みが多くなされている。また、新しい教科・科目であるがゆえに、授業の進め方等について生徒に説明している学校が多い。
- ②実施体制の面では、外部講師に頼らず、常勤の教員で対応できる範囲内で教科・科目を設定する傾向がある。
- ③学校設定教科・科目の設定の仕方(設置数、履修方法)や、カリキュラムの充実のための取組み(記録の蓄積や評価)という点では、試行錯誤の段階にある。

学科別に取組みの状況をみたと、次のことが読み取れた。

- ①総合学科では、設置数や内容の点で、積極的な取組みが見られた。また、このことに起因

して、学校外の講師を活用する傾向もあった。さらには独自のテキストの作成・使用や授業記録の蓄積等の努力も行っていた。一方で、教科・科目の設置数が多いためか、生徒による評価や教員間での反省・検討にまで手が回っていないことが窺えた。

- ②他方、専門学科では、教員同士の反省や検討、あるいは生徒による評価が行われる傾向が見て取れた。
- ③普通科では、生徒や保護者に対する説明が積極的に行われていた。これは、普通教科以外の教科・科目の存在が総合学科や専門学科では前提となっているのに対し、普通科では設置教科・科目が固定的に捉えられる傾向にあり、学校設定教科・科目のような新たな教科・科目が設置された場合には、その位置づけが分かりにくく、説明を必要とするためであると推察された。

(2)学校設定教科・科目の堅実な運営を目指す取組みを規定するもの

学校設定教科・科目の運営の取組みを規定する要因は何か。何に動機づけられて、堅実な運営を目指す取組みが行われているのか。

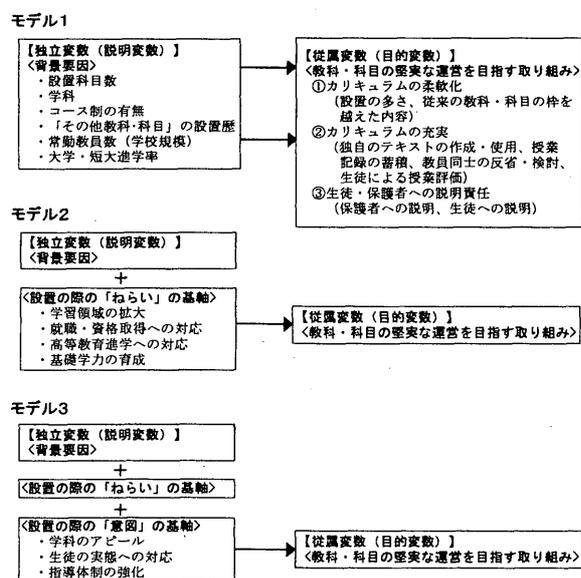
本報告では、堅実な運営を目指す取組みを従属変数(被説明変数)とし、それを規定していると思われる要因を独立変数(説明変数)とする重回帰分析を行うことで、この点を明らかにする。

従属変数について説明を加えておくと、分析で取り上げたのは、堅実な運営を目指す取組みに関する質問(当日配布の「資料」参照)のうち、①カリキュラムの柔軟化、②カリキュラムの充実、③生徒や保護者への説明責任に関する8つの項目でもって構成した合成変数である。なお、担当者(教員)の問題や指導体制については、教科・科目の運営に際して見逃せない点であるが、この点については議論の分かれるところでもあり、関連する項目は合成変数の作成から除外した。さらに、学校設定教科・科目の履修の仕方(必修・選択の別、コース・タイプの枠を越えた履修の可否)についても、望ましい在り方を一つに限ることができないところから、関連する項目は変数のなかに含めないことにした。

独立変数については、まずは、学校・学科の特性に着目してモデルを構成した(図-1/モデル1)。次に、設置の「ねらい」(前項で行った因子分析による4つの因子の因子得点を変量

として使用)を含み込んだモデル(モデル2)と、それに「意図」(同、3つの因子の因子得点を使用)を加えたモデル(モデル3)を構成した。このような構成を行ったのは、学校設定教科・科目はその名の通り、各「学校」が「設定」するものであり、それゆえに、その「設定」を行う各学校の意向、すなわち、教科・科目の設定の際の「ねらい」や「意図」が、その取組み方を規定する要因となりうると考えたからである。

図-1 「学校設定教科・科目の堅実な運営を目指す取組み」の規定因分析のモデル



分析の結果は以下の通りである(表-5)。
 モデル1: 唯一、「設置科目数」において偏回帰係数が大きく、その規定力に強さが見て取れた。そのほかの学校・学科の特性は、規定力に乏しかった。
 モデル2: モデル1よりもR2乗値が大きくなっており、学校設定教科・科目設置の際の「ねらい」が「取組み」を規定していることが示唆された。なかでも「学習領域の拡大」の偏回帰係数が有意に大きく、設置の際に「学習領域の拡大」を「ねらい」としたことが、堅実な運営の取組みに大きく関わっていることが見て取れた。
 モデル3: モデル2よりもR2乗値が上昇し、設置の際の「意図」がさらに重要であることが窺えた。設置の際の「意図」に関する3つの変数にあっては、そのすべてにおいて偏回帰係数が有意に大きく、その点で

「ねらい」よりも「意図」に、「取組み」を規定する要因が多くあることが示された。なかでも「生徒の実態への対応」で最も偏回帰係数が高くなっており、学校設定教科・科目の堅実な運営に向けた取組みは、現実の生徒のニーズへの対応に動機づけられていることが示唆された。

表-5 「学校設定教科・科目の堅実な運営を目指す取組み」の規定因

		モデル1	モデル2	モデル3
		(N=247)	(N=233)	(N=229)
背景 要因	設置科目数	0.215 **	0.119	0.111
	学科(専門学科)	0.098	0.080	0.038
	学科(総合学科)	-0.067	-0.033	-0.056
	コース制(実施)	0.032	0.036	-0.011
	「その他教科・科目」設置歴(あり)	-0.014	-0.007	0.051
	常勤教員数	0.030	0.047	0.062
設置の際の「ねらい」の基礎	大学・短大進学率	-0.100	-0.083	-0.097
	学習領域の拡大		0.360 ***	0.224 ***
	就職・資格取得への対応		0.129	0.011
	高等教育進学への対応		0.116	-0.042
	基礎学力育成		0.074	-0.040
設置の際の「意図」の基礎	学科のアピール			0.229 ***
	生徒の実態への対応			0.287 ***
	指導体制の強化			0.232 ***
モデル集計	修正済R2乗値	0.016	0.190	0.325

注) 変数()内、ダミーの数値を充当
 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(3)結論

以上、分析の結果から学校設定教科・科目の運営について指摘できるのは次のことである。学校設定教科・科目を堅実に運営するための取組みは、設置の際の「ねらい」よりも「意図」、特に「生徒の実態への対応」という動機によってなされていた。言い換えれば、学校設定教科・科目の運営は、理念的というよりは現実的な要因によって突き動かされていた。このような「現実への対応」という動機によって運営されることは、ともすれば学校設定教科・科目が対処療法的で、その場限りのものになるという危険性をはらんでいるものと思われた。その点で、「理念」を体現する教科・科目の「ねらい」とその具体的な姿である教科・科目の「内実」が、実践的にも、また、今回の分析では踏み込むことができなかったという点で研究的にも、改めて問われている。

<参考文献>

櫻井宏明「普通科高校における『学校設定教科』『学校設定科目』の研究—導入・実施過程における課題とその解決に着目して—」筑波大学大学院修士課程教育研究科修士論文、平成13年1月